

品種別 生育・栄養診断の目安

圃場をよく観察して、穂肥のタイミングや量を検討しましょう。

項目	時期	あきたこまち		ゆめおぼこ		秋のきらめき	
		幼穂形成期	減数分裂期	幼穂形成期	減数分裂期	幼穂形成期	減数分裂期
草丈 (cm)	上限	65	75	69	83	68	80
	理想	60	70	64	76	65	76
	下限	55	65	59	69	63	72
茎数穂数 (本/m ²)	上限	560	500	630	560	520	490
	理想	520	470	560	500	500	470
	下限	480	420	460	420	480	450
葉数	理想	11	12.5	10.6	12	10	12
	上限	44	40	39	39	41	41
葉緑素計値 (SPAD)	理想	42	38	37	37	40	39
	下限	40	35	34	34	38	37

穂いもち早期発見・早期防除

葉いもちが多発している圃場では、穂いもちに感染する可能性が非常に高く、穂いもち防除が必要です。葉いもちの発生が一切無く、周辺の発生田からの伝染の影響が無い圃場では、防除の必要はありませんが、多発圃場が隣接している場合などは、出穂期～7日後にラブサイド剤の茎葉散布を行います。

葉いもちの発生がある圃場では、出穂直前と穂揃期にラブサイド剤またはビーム剤の茎葉散布を行ってください。

○防除方法

散布のポイント	薬剤名	希釈倍率/散布量 (10aあたり)	適正使用基準	
			使用時期	使用回数
予防剤と治療剤の混合剤	ブラシン粉剤DL	3～4kg	収穫7日前まで	2回以内
	ブラシンフロアブル	1,000倍/60～150ℓ		
出穂直前と穂揃期の2回	ラブサイド粉剤DL	3～4kg		3回以内
	ビーム剤粉剤DL			
※多発時は傾穂期に追加防除	ラブサイドフロアブル	1,000～1,500倍/60～150ℓ		
	ビームゾル	1,000倍		

※フサライドの本田での使用回数は3回以内なので注意する。

(フサライドはラブサイド剤、ブラシン剤に含まれる成分です。総使用回数に注意してください。)

ビームゾルは傾穂期以降に散布すると薬害を生じることがあるため注意が必要です。

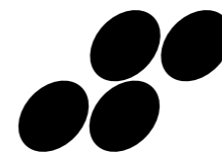
紋枯病対策

昨年多発した圃場や、出穂後高温多湿な年は、病斑が上昇しやすくなります。穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は減収となるため圃場観察を行い、防除を行いましょう。

散布時期	薬剤名	剤型	散布量・希釈倍率(10aあたり)	備考
出穂20～10日前	モンガリット	粒剤(1kg粒剤、3kg粒剤)	1K粒:1kg、3K粒:3～4kg	粒剤を使用する場合は、前年多発した圃場に限定。
出穂直前～穂揃期	バリダシン	粉剤、液剤	粒剤:3～4kg、液剤:1,000倍 150%	出穂直前の防除に重点をおき、多発が予想される場合は出穂期以降にも散布する。
	モンカット	粉剤、フロアブル	粒剤:3～4kg、液剤:1,500倍	
	モンセレン			

カドミウム対策

対象地域では、カドミウムを稲に吸収させないため、出穂前後各3週間は常時水を張り、田面が空気に触れないように管理してください。カドミウムは土壌中の酸素が少ない状態になると土壌中の硫黄と結合し水に溶けにくくなり、稲に吸収されにくくなります。



安心のネットワーク

NOSAI

No.5

農業技術情報

令和2年7月発行

発行：秋田おぼこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所

監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



JA秋田おぼこ

生育診断と天気を読み、暑さを乗り切る肥培・水管理

管内の6月25日現在の生育状況は、草丈39.5cmで平年より長く(平年比109%)、茎数453本/m²で多く(平年比108%)、葉色43.1でやや淡く(平年比98%)、葉齢は9.0葉で進んでいます(平年差+0.6葉)。平年並み以上の生育となっており、目標生育量が確保されたことから、中干し時期に入りました。

向こう3か月予報(仙台管区気象台6月25日発表)では、7～9月は気温が高いと予報されているため高温登熟への備えと、茎数が多いことから生育診断による穂肥の検討が必要です。本号では8月中旬まで管理を特集します。基本的な栽培管理を再確認して、異常気象に即応する栽培を行いましょう。

7月下旬～8月中旬の栽培技術留意点

①高温登熟対策

長期予報で今年の夏は気温が高く暑いと予報されました。春先から高温登熟への備えを呼び掛けてきましたが準備は万全ですか?稲が夏バテしないように、生育診断による追肥の検討をし、登熟期の水管理で高温登熟を軽減させましょう。併せて、限られた水資源を有効利用するため、節水を心掛けながら地域で水回しの話し合いをするなど、気象変動に智力を結集し乗り切りましょう。

高温登熟対策
追肥による体づくり
水管理で根を冷やす
地域で協力し合い水回し

②穂肥・実肥の判断

今年の生育状況から、幼穂形成期(7/15頃)、減数分裂期(7/25頃)に生育調査を行い、穂肥の判断をします。本年は移植時の低温による生育遅延が一部圃場で見られました。好天により回復してきているものの、移植日の違いによって圃場間差が見られます。一律な穂肥ではなく、稲に合わせた判断をお願いします。さらに、茎数が多くなっていることから、葉色が低いまま出穂・登熟を迎えると、全ての穂や籾に養分が送られず白未熟粒の発生による品質低下が心配です。場合によっては出穂期前後に行う実肥が必要になるかもしれません。

薄い葉色では夏を乗り切れない → 生育診断による穂肥
場合によって実肥検討

③減数分裂期から低温時は深水

減数分裂期から穂ばらみ期にかけて、日平均気温20℃(最低気温17℃以下)の日が続く日照時間の少ない場合には障害不稔が起きる可能性が高くなります。高温予報年でもこの時期には一時的な低温に遭遇する場合がありますので、天気予報を確認し、低温時には15cm以上の深水管理にして、幼穂を低温から保護してください。

減数分裂期から穂ばらみ期
日平均気温20℃
(最低気温17℃以下)
少照 → 障害型不稔の可能性
↓
深水管理で幼穂保護
幼穂形成期:10cm以上
減数分裂期:15cm以上

④病虫害雑草対策

梅雨時期は高温多湿な状態が続き、いもち病が発生しやすい時期です。さらに、高温が予想されているため、紋枯病の発生も心配されます。また、ノビエやホタルイが残草していると斑点米カメムシ類の繁殖地となるため、早期に除去してください。一度病虫害雑草が発生すると抑えるのに一苦労しますので、水回り時などに病虫害雑草が発生していないか確認し、早期発見早期防除に努めてください。

こまめな圃場確認で
早期発見早期防除

安心のネットワーク
NOSAIから

園芸施設共済 台風シーズン到来!今すぐご加入を!



注意
台風の進路が発表されたときなどの
かけ込み加入はできません。

参考)3間×10間のハウス
22万1千円の補償金額
掛金は4,639円です
※ビニールの被覆期間は12カ月

高温対策

今夏は気温が高いと予報されているため、高温登熟の危険性が高くなっています。高温登熟に遭遇すると白未熟粒やくさび米、胴割米が発生するほか、米粒が小さくなってしまい品質低下が著しくなります。登熟期の対策は水管理のみですので、溝切り跡を利用して効率的な水管理をしてください。また、用水不足の地域では、地域で協力し合い水回しを行ってください。

出穂期～登熟期の水管理

出穂当初は水を多く必要とする時期なので、走り穂が出始めてから穂揃い期までは水深5～6cm程度の湛水管理とします。その後、落水期まで2～3cmの浅水、間断かん水を行います。

落水の時期は、概ね出穂後30日とします。早期に落水すると葉色の低下、枯れ上がり、根の機能減退によって収量・品質・食味が低下するなどの悪影響を及ぼします。圃場や用水の条件により異なりますが、収穫作業に支障の出ない時期まで落水を遅くすることがポイントです。



効率的な水管理には溝切りは必須技術

高温時、フェーン時の対応

日中の最高気温30度以上の日やフェーン現象により乾燥した風が吹く場合は、根の吸水量より葉の蒸散量が多くなり、葉先枯れや株元の枯れ上がりが進み、登熟不良の原因となります。事前に予想される場合は、早めにしっかりと湛水し、登熟障害を回避してください。

ポイント

水の入れ替えによって地温を下げることで、根の活力が落ちにくくなる。

日中、浅水管理し、夕方から夜間に水入れ替えすると温度差で根の活力が落ちにくい。

フェーンや台風通過時は、3cm以上の湛水管理

過去の事例から学ぶ

平成22年(2010年)は高温登熟に遭遇した年でした。当管内でも、充実度不足や心白及び腹白の発生により一等米比率が低下してしまいました。過去の事例を思い出し、今年の豊作のために活かしてください。

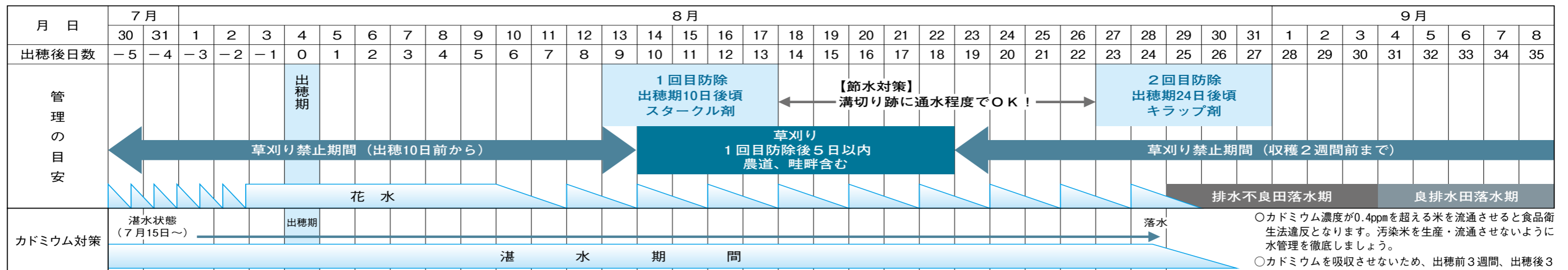
平成22年産米の収量・品質低下要因 ※秋田県稲作指導指針より

- ① 田植え時の低温に伴う初期茎数の不足
- ② 分けつ後期の日照不足と高温による長草化と分けつ抑制
- ③ 生育ステージの前進
- ④ 出穂期前の葉色低下
- ⑤ 出穂前の高夜温と日照不足による蓄積養分の減少
- ⑥ 登熟期の高温と日照不足による植物体の消耗と光合成能力低下
- ⑦ 出穂30日頃からのデンプン転流阻害
- ⑧ 高温登熟や水分ストレスによるくさび米等の被害粒発生

【対策】

- ・ケイ酸投入等、土づくりの励行
- ・生育調査・診断結果の把握と追肥有無・散布量の検討
- ・出穂前後の湛水管理
- ・水管理で地温を下げ、根の活力維持

出穂期～登熟期の水管理



○カドミウム濃度が0.4ppmを超える米を流通させると食品衛生法違反となります。汚染米を生産・流通させないように水管理を徹底しましょう。
○カドミウムを吸収させないため、出穂前3週間、出穂後3週間の計6週間は常時湛水管理を行い、田面が露出すると土壌が酸化し、カドミウムが吸収されやすくなります。

斑点米カメムシ類対策

秋田県病害虫防除所より6月30日に発表された農作物病害虫発生予察情報発生予報第3号(7月予報)によると、本年の斑点米カメムシ類(アカスジカスミカメ)は、発生時期は早く、発生量はやや少ないと予想されています。

ただし、ノビエやホタルイ等カヤツリグサ科雑草が多く残ってしまうと、圃場内への侵入が多くなり被害が増えてしまいます。圃場内や畦畔、農道、休耕田などの雑草地の除草、草刈り、薬剤防除を組み合わせ、斑点米被害を抑えましょう。

主なカメムシの特徴と防除概要



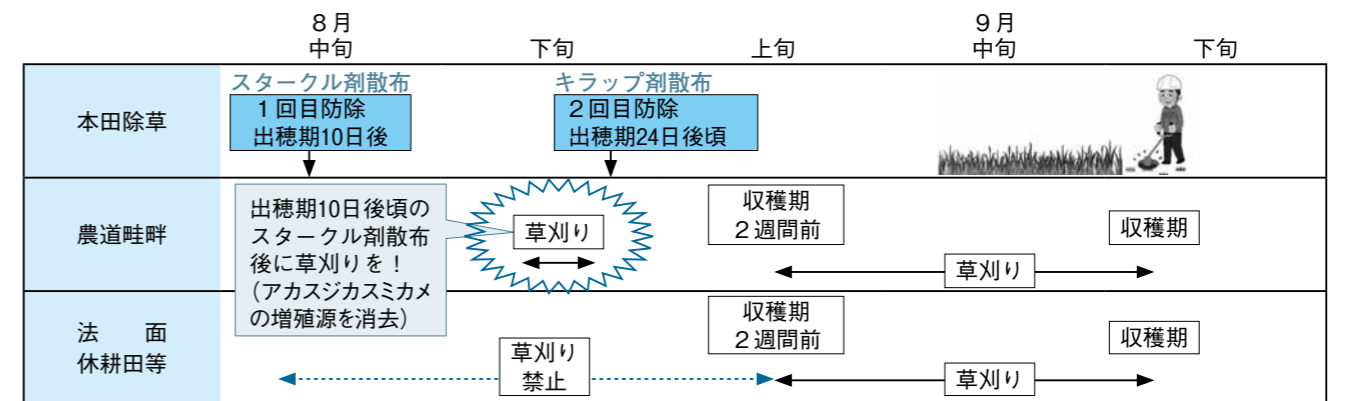
体長：成虫で4.6～6mm。
特徴：背側中央部に紅色の条がある。ノビエ、ホタルイ等カヤツリグサ科雑草の穂に産卵する。イネにはほとんど産卵しない。飛翔性あり。



体長：成虫で5～6mm。
特徴：細長い緑色で、触覚は赤色。水田内で一生を過ごし、稲の穂に産卵する。割籾を中心に加害する。飛翔性あり。

1. 耕種的防除

- ① 出穂期10日後頃に茎葉散布剤を散布後、5日以内に畦畔や農道の草刈りを実施し、アカスジカスミカメの増殖源となるイネ科雑草の除去に努めます。その後、稲の収穫2週間前まで草刈りを行いません。
- ② 法面や休耕田などで薬剤を使用しない雑草地は、稲の出穂10日前までに草刈りを実施し、その後収穫2週間前までは草刈りを行いません。



2. 薬剤防除

通常の防除は出穂期10日後頃の一回散布を基本としますが、今年はカメムシの発生が多いことから、1回の防除では防ぐのが難しいため、出穂期10日後頃と出穂期24日後頃の2回散布を基本としましょう。

散布時期	薬剤名	希釈倍率/散布量 (10aあたり)	適正使用基準	
			使用時期	使用回数
出穂期10日後頃	スタークル粉剤DL	3kg	収穫7日前まで	3回以内
	スタークル液剤10	1,000倍/60～150ℓ		
追加防除 出穂期24日後頃	キラップ粉剤DL	3～4kg	収穫14日前まで	2回以内
	キラップフロアブル	1,000～2,000倍/60～200ℓ		